

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト研究会報告要旨集：ヨークにおけるフィーニアン蜂起(1867年3月5日)

Takagami, Shin-ichi / 高神, 信一

(出版者 / Publisher)

Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University / 法政大学比較経済研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー / 比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

125

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

2005-04-20

比較史的アプローチによる近代アイルランド シリーズ No. 2

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト
研究会報告要旨集

後藤 浩子（編）

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」 プロジェクトの活動概要

1. プロジェクトのねらいと成果

本プロジェクトは、アイルランド史をイギリス、アメリカそしてヨーロッパとの同時代的関係において捉えなおしてみようという企図のもとに集った日本のアイルランド史研究者によって遂行された。各国史、つまりナショナル・ヒストリーを超える視座からアイルランド史を見る必要をメンバー達に痛感させたのは、日本のアイルランド史研究者が長らくお世話になってきたダブリン大学トリニティ・カレッジのL・M・カレン教授による「比較史」的アプローチの提唱であった。このような理由もあって、本プロジェクトのそもそもの発端であった日本アイルランド協会主催の2002年度アイルランド研究年次大会シンポジウムの際には「なぜ、いまアイルランド史か——イギリス、ヨーロッパ・世界」というテーマであったものを、比較研プロジェクトとして続行する際に「比較史的アプローチによる近代アイルランド」に変更させて頂いた。また、プロジェクト開始にあたっては、カレン教授を招き、「比較史とは何か」を検討する研究会を開催した。（そこでのカレン教授の講演は比較経済研究所ワーキングペーパーNo.120に掲載されている。）

イギリス、アメリカ、ヨーロッパの影響を考慮することは、とりわけ、アイルランド史においては重要な意味をもつ。というのは、「イギリス」という国家はそもそも、たんなるイングランドの拡大版ではなく、それぞれが歴史的個性をもつイギリス諸島の諸地域、すなわち、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド／北アイルランドによって——そして一時期は北米植民地さえも含んで——構成されてきた複合的国家だからである。したがって、イギリス史は、後三者がイングランドによる支配を受けたという一方的関係ではなく、それぞれの双方向的相互作用のプロセスとして捉えられる必要があり、そのためには、アイルランド史もまた、イギリス諸島史—イギリス帝国史—ヨーロッパ世界史という重層関係の中で展開されるものとして理解されなければならない。

以上のような「大志」を懐いて、プロジェクト・メンバーは過去2年間に10回の研究会を重ねてきた。その成果をまとめたものが本ワーキングペーパーだが、以下に続く報告要旨集は、プロジェクト報告書の性格を兼ねていることもあり、編年史的ではなく報告順の編集にさせて頂いた。したがって、時系列の流れを捉えにくいのではという懸念がもたれるが、各メンバーによる個々の史実の分析は、対イングランド、スコットランド、あるいは対アメリカ、ヨーロッパ関係とその影響をはっきりと抽出しており、「ナショナル・ヒストリーを超える」という本プロジェクトの狙いは多少なりとも達成できたかと思われる。

プロジェクト責任者
後藤 浩子
(法政大学経済学部)

第6回研究会

日時： 2004年4月17日(土) 法政大学市ヶ谷キャンパスBT19階D会議室
報告者： 高神信一(大阪産業大学)
テーマ： 「コークにおけるフィーニアン蜂起(1867年3月)」
コメンテーター： 勝田俊輔(岐阜大学)

【報告要旨】

コークにおけるフィーニアン蜂起(1867年3月5日)

高神 信一

1867年3月5日から6日にかけて、フィーニアンたちはアイルランドの各地で蜂起した。フィーニアンとは、イギリスからの独立を武力闘争によって獲得しようとしたIRB(Irish Republican Brotherhood)のメンバーのことである。じっさいにフィーニアンたちが蜂起した場所は、ダブリン州、コーク州、ティッペラリー州、リムリック州、クレーター州、クイーンズ・カントリー州、ラウズ州である。だが、フィーニアン蜂起は失敗した。また、アイルランド西部や北部のアルスター州では蜂起は決行されなかった。本報告ではコークの蜂起を扱う。

ここで蜂起が決行されるまでの過程を簡単に説明しておこう。IRBの最高指導者ジェームズ・スティーブンスは1866年以内に蜂起を決行することを公言していたにもかかわらず、蜂起の延期を主張し、指導者の地位から引き摺り下ろされた。彼に代って組織の実権を掌握したのが、アメリカ人将校たちである。アメリカ人将校とは、南北戦争に従軍後、アメリカ軍を退役したアイルランド系移民たちだった。彼らの中心となったのが、ケリー大佐である。蜂起決行を決意した彼は1867年はじめにアメリカからイギリスに渡り、蜂起の指揮を取るようになった。

ところでコークの蜂起については、W. McGrath, 'The Fenian Rising in Cork', *Irish Sword*, vol. 8, 1967-8, pp. 245-54があるが、この研究にはまだ補うべき多くの課題が残されている。そうしたこともあって、フィーニアン蜂起全体を概略的に明らかにしたL. O. Broin, *Fenian Fever: an Anglo-American dilemma*, New York, 1971は、コークにおけるフィーニアン蜂起をつぎのように述べている。

3月5日の夕方、若者たちのグループがコーク市郊外の集合地点に向かって市内を出ていった。彼らは異なった部隊を編成し、「マンスター地方のフィーニアンたちの集合地点」であるリムリック・ジャンクション(約60マイル離れた)の方向へ北上していった。彼らはその途上で電信線を遮断し、鉄道の線路を破壊した。彼らの武装状態は貧弱だったが、彼らのなかにはマックルアー、マッケイ、オブライエンがおり、この3名は自分たちの置かれた苦境を少しでも意味あるものしようと、警察バラックへの攻撃を命じた。その攻撃のなかで2名の警官が負傷し、そのうちの1名はその後死亡した。キャッスルマーターの警察バラックを攻略す

る試みは失敗し、1名のフィーニアンが死亡した。バリーノケインでは警官が降伏し、武器を放棄したあと、警官はマーローまで退却することが許された。フィーニアンたちはイギリス軍兵士が近づいてきたとき、混乱し気力を失い、敗走した(p. 157)。

McGrath や O Broin は蜂起の複雑な過程を十分に解明したとはいえない。そこで本報告では、一次史料を参照し、ダブリンの蜂起との比較を通じて、コークの蜂起を明らかにする。

コークの蜂起ではフィーニアンを三つのグループに分類することができる。第一は、バリーノケインの警察バラックを攻撃したグループである。このグループは4000名から構成されていたといわれるが、その武装状態は極めて貧弱で2丁のショットガン、1丁のライフル銃、5丁の拳銃、18本の槍という有様だった。彼らはバリーノケインの警察バラックを攻略したものの、その後解散してしまう。第二は、キャッスルマーターの警察バラックを攻撃したティモシー・デイリーを指導者とするグループである。彼らは警察バラックを攻略できず、さらに悪いことにデイリー自身が死亡し、その後敗走していった。第三は、ノカデューンの沿岸警備隊を襲い、武器を強奪したマックルアーのグループである。彼らはヨール近くのキリーに集合し、他のグループの到着を待ったが、他のグループは現れず、キャッスルマーターに向い、その後解散した。フィーニアンたちは治安当局とのあいだに「大規模な戦闘」をおこなわないまま解散し、蜂起は失敗した。

本報告では、このコークの蜂起をダブリンの蜂起と比較しながら説明した。まずダブリンの蜂起では、次のような過程をたどった。多数のフィーニアンはダブリン市郊外のタラ・ヒルに集合し、ゲリラ戦を展開するはずだったが、指揮系統に混乱が生じ解散してしまった。ダブリンのフィーニアン蜂起の司令官は、タラ・ヒルには向わずそこから離れた地点に集合し蜂起部隊を指揮しようとしたが、指揮しようとする「部隊」との連絡が取れなかった。また、あるグループはタラ・ヒルには直接集合せずに、ステッパサイドなどにある警察バラックを攻撃しイギリス軍の注意を引こうとした。タラ・ヒルに集合したグループやステッパサイドなどの警察バラックを攻撃したグループが、イギリス軍を市内から誘き出した時点で、市内のフィーニアンたちは市内の主要な建物を攻撃する予定であった。しかし、蜂起司令官からの攻撃命令がくだされなかったため、その攻撃はおこなわれなかった。

ダブリンの蜂起からコークの蜂起を説明すると、次のようにいえる。大多数のフィーニアンがコーク市の郊外に集合し、その後バリーノケインの警察バラックを攻撃した。このグループはタラ・ヒルに集合したグループの役割を与えられ、ゲリラ戦を開始するはずであったろう。コークの蜂起司令官はミドルトンに集合する予定であった。ダブリンの蜂起司令官が多数のフィーニアンが集合した地点とは異なる地点に赴いたことと類似している。だが、ダブリン蜂起の司令官とは異なり、コーク蜂起の司令官は蜂起直前に逮捕されてしまい、司令官不在のまま蜂起が決行された。キャッスルマーターの警察バラックを攻撃したグループは、ダブリンの蜂起でいえば、ステッパサイドを攻撃したグループのような存在であったと考えられ、イギリス軍を誘い出す陽動作戦を展開する予定だったのであろう。

コークのフィーニアン蜂起は失敗したが、それにはいくつかの理由が考えられる。第一に、武装状態が極めて貧弱であった。第二に、蜂起司令官が逮捕され、総司令官が不在のまま蜂起が決行された。第三に、作戦計画が杜撰であり、多くのフィーニアンたちは自分たちがどのような行動を取るべきか、を理解していなかった。第四に、蜂起直前になって

それまでの組織を解体し、アメリカ人将校に権限を集中させた。いずれにせよ、蜂起失敗の原因は、フィーニアン的一般メンバーではなく、指導者であるアメリカ人将校にあったのである。